

教 育 研 究 業 績

氏名 木村 祐子
学位：博士（社会科学）

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
教育学、社会学	教育社会学、医療社会学	
主要担当授業科目	教育社会学概論 A、教育学入門、児童教育概論、家族臨床演習 I、保育原理 I、保育実習指導 I（保育所）保育実習 I・II、保育・教職実践演習（幼・小）、課題研究 A・B	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
①映像データや資料（新聞、雑誌、図表等）の活用	平成 20 年 4 月～現在に至る	講義内容に関連した映像を学生に見せ、現代の教育問題を身近な問題として理解し、多面的に考えることの重要性を伝えた。映像や統計データの使用は、授業内容の理解度の高まりに有効であった。また、映像の視聴だけで終わることがないように、議論する機会を設けた。
②コメントペーパーや Forms の活用	平成 23 年 9 月～現在に至る	学生に授業の感想や疑問点などをコメントペーパーや Forms に書かせ、次の授業でその内容を紹介・解説し、フィードバックをした。それにより、授業内容の理解度を高めるだけでなく、学生の文章力の向上や物事を多角的に考える力を養成することができた。
③調査方法（実践編）	平成 26 年 10 月～現在に至る	演習科目の講義（家族臨床演習 I など）では、質的調査の実践編として、学生にテーマを設定させ、調査対象を選定し、インタビュー調査を実施させた。実際に調査を経験することで、インタビュー調査の面白さを実感でき、また、反省点や難しかった点が明確になり、調査への関心が高まった。
2 作成した教科書、教材 『1 回で受かる！保育士過去問題集』 14 年版-16 年版、成美堂出版	平成 26 年 3 月 1 日～平成 28 年 1 月 10 日	保育士試験の過去問題集で「教育原理」（2014、2015 年版）「保育原理」（2015、2016 年版）の解答・解説を担当した。
田岡由美子編『新時代の保育双書 ともに生きる保育原理』、みらい	平成 30 年 4 月 10 日	保育原理のテキスト。「第 9 章 保育におけるさまざまな配慮」（pp.122-132）を担当し、乳幼児の健康や安全についての配慮、障害児への対応などについての基本的な知識を整理した。
田岡由美子編『新時代の保育双書 ともに生きる保育原理』第 2 版、みらい	令和 7 年 2 月 28 日	保育原理のテキスト。「第 9 章 保育におけるさまざまな配慮」担当し、一部、加筆修正した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価	平成 28 年 4 月～	「授業評価アンケート」では 5 段階評価のうち、概ね 4 以上の評価を得ている。
4 実務の経験を有する者についての特記		特になし
5 その他 高等学校での模擬授業	平成 28 年 12 月 20 日	東京都立杉並総合高等学校（保育・幼児教育、1 年生対象）
	平成 29 年 7 月 18 日	埼玉県立久喜高等学校（教育学、2 年生対象）

	日			
	令和1年 6月24日			都立忍岡高等学校（保育・幼児教育、2年生対象）
	令和7年 3月4日			都立大成高等学校（教育学、1年生対象）
職務上の実績に関する事項				
事項	年月日	概要		
1 資格, 免許 学芸員資格取得（南大証第 1119 号） 専門社会調査士取得（第 001811 号）	平成 13 年 3 月 20 日 平成 24 年 10 月 1 日			
2 特許等		特になし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 第 36 回進路指導（就職）全県研究会（長野県）講師 第 55 回全国学生相談研修会 東洋大学大学院文学研究科 FD 研修講師	平成 24 年 1 月 28 日 平成 29 年 12 月 令和 6 年 1 月	高等学校の教員を対象に「若年者の雇用・就業の現状と展望」について講演した。 日本学生相談学会主催の研修 3 日間に参加し、修了した。 「発達障害などの障害がある学生への合理的配慮」について講演した。		
4 その他 （研究助成） ①お茶の水女子大学 21 世紀 COE 公募研究 平成 18 年度 ②財団法人社会安全研究財団 平成 18 年度＜B 若手研究助成＞ ③特別教育研究経費による事業コミュニケーションシステムの開発によるリスク社会への対応（お茶の水女子大学） ④お茶の水女子大学グローバル COE 公募研究 ⑤日本学術振興会平成 26 年度研究成果公開促進費「学術図書」 ⑥科研費・基盤（C）	平成 18 年 平成 18 年 平成 18 年 平成 19 年 平成 26 年 令和 5 年	「少年非行における医療的解釈と実践の構造－言説分析と臨床家へのインタビュー調査から」 「少年非行の心理・医療的な解釈と臨床的実践の構造」 「発達障害児への支援体制に関する社会学的研究－『連携』の観点から」 「ビジネスにおける心理学的な知識の活用と意識－採用と職業指導の場面から」 「発達障害支援の社会学」（課題番号 265207） 「発達障害児の支援格差とその社会的要因に着目した実証研究」（研究課題 23K02219）		
研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1 『発達障害支援の社会学』	単著	平成 27 年 2 月	東信堂	子どもの問題行動は「発達障害」にともなう諸症状として医療的に再解釈され、対処されるようになった。しかし、支援現場では、障害の定義や支援方法が確立されておらず、混乱した状態であった。そこで、発達障害児支援の実態を明らかにし、その背景や原因を分

<p>2 『教育社会学事典』</p> <p>3 『平等の教育社会学－現代教育の診断と処方箋』</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成30年1月</p> <p>平成31年2月</p>	<p>丸善出版</p> <p>勁草書房</p>	<p>析・考察した。具体的には、①発達障害支援の制度的背景、②支援の実態把握（小学校、療育施設、矯正施設）、③医療に対する人々の態度・志向性に焦点をあてた。研究方法は、文献・資料調査とインタビュー調査を用いた。</p> <p>「医療化と発達障害」(pp.552-553)を担当した。発達障害を医療化現象の一つと捉え、病いの社会的構築性や政治性を説明した。また、教育現場における支援上の問題は現場の論理でうまく運用・管理されていることを指摘した。</p> <p>「発達障害児・者」として支援を受けるかどうかは、発達障害児の親の属性（家庭環境、経済力など）や医療に対する意識や態度（障害の受容度、熱心さ、情報収集力など）に左右されることを親の語りに基づいて明らかにした。これは医療アクセスの格差であるが、医療格差に焦点をあてれば、発達障害は実体化されたものとして取り扱われる。逸脱研究が蓄積してきた社会的構築性の観点を見失うことになり、ジレンマを抱えることを論じた。</p> <p>「第9章 選択としての発達障害と医療格差－発達障害児の親へのインタビュー調査から」(pp.141-158)</p>
(学術論文)				
<p>1 「子どもの不適応的行動の医療化－『学習障害』概念の制度化過程」</p> <p>2 「医療化現象としての『発達障害』－教育現場における解釈過程を中心に」</p> <p>3 「中学生調査にみる心理主義的な意識と行動」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>共著</p>	<p>平成17年3月</p> <p>平成18年12月</p> <p>平成20年1月</p>	<p>お茶の水社会学研究会, 『Sociology Today』第14号, pp.18-30</p> <p>日本教育社会学会, 『教育社会学研究』第79集, pp.5-24</p> <p>南山大学紀要自然科学・保健体育, 『アカ</p>	<p>1990年代中頃から「学習障害」や「ADHD」などの制度化が急速に進んだ。制度の成立がどのような過程を経てなされたのかを文献・資料に依拠して分析した。「学習障害」制度化は、単に医学的知見の蓄積によってではなく、親の会をはじめとする当事者団体や専門家集団によるクレーム活動によっておしすすめられたことを明らかにした。</p> <p>小学校で児童の不適応や逸脱がいかにより医療的に解釈・支援されているのかを教員9名へのインタビュー調査に基づいて明らかにした。子どもの不適応や逸脱は医療的に解釈・支援されつつあったが、教員はそうした状況に、抵抗や葛藤を抱えていた。また、支援現場では曖昧で不確かな実践が多く存在していた。しかし、これらの問題は、現場の実践を円滑に行おうとする教員の戦略や肯定的な意味づけによって、最小限にされていた。</p> <p>質問紙調査に基づき、中学生（2年生）の心理主義的な意識や行動について考察した。心理主義的な意識は、大都市</p>

4 「少年非行と障害の関連性の語られ方ーDSM 型診断における解釈の特徴と限界」	単著	平成21年3月	デミア』第14巻, pp.21-28 3節担当 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科, 『人間文化創成科学論叢』第11巻, pp.227-236	地域と非都市地域に狭まれた市部で高かった。特に、女子の方が友人関係において高度な感情管理を行う傾向にあった。しかし、高度な感情管理をしている者ほど、スクールカウンセラーに対して期待を抱いていなかった。 共著：加藤隆雄、小針誠、木村祐子 1990年代以降、非行は発達障害など医療的に解釈されつつある。そこで、専門家や実践家の文献に基づき、非行と障害の関係性がどのように語られているのかを明らかにした。非行の医療的な解釈は、既存の言説（環境要因や情緒的要因）を含むため、医療的な解釈と既存の解釈が併存する特徴をもっていた。
5 「PTSD はいかに語られたかー新聞記事における心理主義化現象の分析」	共著	平成22年3月	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科, 『人間文化創成科学論叢』第12巻, pp.191-199	PTSD（心的外傷後ストレス障害）がどのような社会問題と関連づけて語られているのかについて朝日新聞の記事内容を分析した。PTSD が語られる領域は、1990年代後半以降、「災害・事故」、「犯罪」、「教育」、「医療」、「労働」などへと拡大していた。また、診断が付与される対象も当事者から目撃者へ、被害者から加害者へ、大人から子どもへと拡大していた。PTSD は、以前のように、被害者のための障害としてではなく、誰もが患う可能性がある障害として語られた。 共著：木村祐子、小針誠
6 「少年非行における医療的な解釈と実践ー実践家の語りにもみる医療化プロセス」	単著	平成23年6月	日本教育社会学会, 『教育社会学研究』第86集, pp.159-178	矯正施設において、非行が医療的に解釈・支援されていくプロセスを実践家（家庭裁判所調査官、法務技官、法務教官）17名の語りに基づいて明らかにした。特に、医療実践にみられる曖昧さを医学上の不確実性と組織上の不確実性に類型化し、それらが実践家によっていかに管理・運用されているのかについて明らかにした。
7 「子どもの不適応・逸脱の医療化ー日本の学校・療育施設・矯正教育の現場における実践家の解釈過程ー」	単著	平成25年3月	博士学位論文	博士論文に加筆・修正を加え、『発達障害支援の社会学』（東信堂）を出版した。内容は、著書の概要を参照。
8 「医療化の衰退と物語作用ー少年事件をめぐる言説の分析」	共著	平成30年6月	南山大学紀要『アカデミア人文・自然科学編』第16号, pp105-118	少年事件報道は、物語性を有するものであるが、そこに不安定要素をもたらす医療化言説は物語を崩壊させるため、衰退していくであろうことを新聞記事と発達障害児・者の親へのインタビューデータに基づいて明らかにした。共著：加藤隆雄、木村祐子

9 「医療化はいかに物語られたかー少年事件報道記事のテキストマイニングによる分析ー」	共著	令和 2 年 1 月	南山大学紀要『アカデミア人文・自然科学編』第 19 号, 19-30	1997 年以降の少年犯罪を報道した新聞記事にテキストマイニング分析を施し、医療化傾向がどのような趨勢をたどっているのかを分析した。 共著：加藤隆雄、木村祐子
10 「発達障害児支援における早期発見・支援の構成」	単著	令和 4 年 3 月	東京成徳大学紀要『子ども学部紀要』第 12 号, pp.49-58	発達障害児をもつ母親の語りに基づいて、親が子どもの障害についてどのようにして気づき、医療機関へとつながったのかについて分析した。子どもの教育的ニーズは、子ども自身の問題だけではなく親や周囲の人々を巻き込んだものであり、状況依存的に構成されるものであることを明らかにした。
11 「障害児教育に関する社会学的研究の動向」	共著	令和 5 年 12 月	日本教育社会学会, 『教育社会学研究』第 113 集, pp.73-107	障害児教育の社会学的研究をレビューし、今後の展望について検討した。 共著：木村祐子、鶴田真紀、末次有加、佐藤貴宣
12 「障害児支援における格差とその社会的決定要因ー通所児童のデータ分析ー」	共著	令和 7 年 1 月	南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編, 第 29 号, pp.111-125	現在問題になっている医療格差が、障害児支援の領域でどのように表れているのかについて、通所児童のデータに基づいて分析した。 共著：加藤隆雄、木村祐子、野々部夫磯子、酒井真由子、越川葉子、鶴田真紀、末次有加
(その他)				
(報告書) 1 「若年者の就業状況・キャリア・就業能力開発の現状」	共著	平成 21 年 9 月	『JILPT 資料シリーズ』No.61 独立行政法人労働政策研究・研修機構, pp.2-27, pp.32-5 担当	1990 年代以降、非正規雇用者の増加が指摘されており、とりわけ若年者においてその大幅な上昇が問題化している。そこで、労働政策研究・研修機構は、若年層（フリーターやニート）の雇用状況の変化とその背景要因を分析するために、『就業構造基本調査』（総務省統計局）の特別集計を過去のデータ（2002 年、2005 年）と比較しながら分析した。 共著：小杉礼子、木村祐子
2 「理工系女子学生のキャリア展望調査報告書」	共著	平成 27 年 12 月	お茶の水女子大学 pp.5-60 担当	全国の大学に所属する理工系女子学生および大学院生のキャリア展望とそれを達成するうえでの問題点を明らかにした。 共著：中島ゆり、木村祐子
(学会発表) 1 「教育場面における不適応行動の医療化ー学習障害の事例から」	単	平成 16 年 9 月	日本教育社会学会第 56 回大会 東北大学	内容は（学術論文）の 2 を参照。
2 「発達障害児をめぐる解釈と実践ー不適応と非行の間」	単	平成 17 年 9 月	日本教育社会学会第 57 回大会 放送大学	教育や非行の問題が語られる際に、「発達障害」がどのように語られ、扱われているのかを検討した。医療的な解釈（発達障害）は、これまで語られてき

3 「少年非行における医療的な解釈」	単	平成18年5月	日本保健医療社会学会第32回大会 立教大学	た言説（非医療）をうまく取り込みながら拡大していることが明らかになった。 内容は（学術論文）の4を参照。
4 「教育問題における心理主義化の動向と理論的検討－原因帰属の観点から」	単	平成18年9月	日本教育社会学会第58回大会 大阪教育大学	人の内側にある「こころ」を重視する傾向（心理主義化）が1990年代以降、さまざまな領域（ビジネス、教育、司法、医療など）で指摘されるようになった。そこで、心理主義化と医療化の関係性について理論的に考察した。 内容は（学術論文）の4、6を参照。
5 「少年非行と発達障害の関連性についての言説と実践」	単	平成18年10月	日本教育社会学会第59回大会 茨城大学	
6 「中学生における心理主義的な意識と行動」	共	平成19年9月	日本教育社会学会第60回大会 上越教育大学	内容は（学術論文）の3を参照。 共同発表：加藤隆雄、小針誠、木村祐子
7 「『発達障害』者支援にみる医療の不確実性－支援機関における連携の限界」	単	平成21年10月	日本社会学会第82回大会 立教大学	内容は（学術論文）の7を参照。
8 「不確実性の管理・運用と医療化－発達障害児の支援者と当事者の語りから」	単	平成25年10月	日本社会学会第86回大会 慶應義塾大学	発達障害児の親（9名）へのインタビュー調査に基づき、彼らが医療の曖昧さや不確かさ（不確実性）とどのように向き合い、それらを乗り越えてきたのかを明らかにした。
9 「発達障害という選択とその困難－親へのインタビュー調査から」	単	平成28年9月	日本教育社会学会第68回大会 名古屋大学	発達障害児の親の医療に対する志向性（積極性や熱心さなど）が診断や療育・治療に与える影響について検討した。当事者やその親が「健常児」／「障害児」を選択するプロセスが明らかになった。
10 「新聞記事における少年犯罪報道の分析－医療化論と物語論の視角から」	共	平成29年10月	日本教育社会学会第69回大会 一橋大学	内容は（学術論文）の8を参照。 共同発表：加藤隆雄、木村祐子
(書評・リプライ) 1 鶴田真紀氏の『発達障害支援の社会学』の書評に答えて	単著	平成28年5月	『教育社会学研究』第98集, pp.266-267	鶴田氏の書評をうけて、医療における不確実性の管理と運用の変化について論じた。
2 書評に答えて	単著	平成28年10月	『ソシオロジ』第61巻2号, pp.99-103	土屋葉氏の書評に答え、発達障害児の当事者（障害児とその親）と医療の関係性について論じた。

3 書評 村田観弥[著]『障害支援と関係の教育学－専門性の権力をめぐって』	単著	平成 30 年 11 月	『教育社会学研究』第 103 集, pp.158-160	障害児・者の支援者が専門性を獲得していく過程とそこに付帯する権力についての研究概要を紹介した。
4 書評 鶴田真紀[著]『発達障害の教育社会学：教育実践の相互行為研究』	単著	令和 2 年 5 月	『教育社会学研究』第 106 集, pp.209-211	著書では「発達障害」が療育施設や学校にいる参加者の相互行為をとおして可視化され、構成されていく過程を映像データに基づいて丹念に分析しており、その点を評価した。